

# ESD × 生物多様性しんぶん

2011年夏号

監修 高田のひまわり photo: 村上千里

このニュースレターは、ESD-Jが取り組む「ESD×生物多様性」プロジェクトのプロセスや成果をお伝えするために発行しています。

## ESD×生物多様性プロジェクト2011のプラン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

### 多様性ある地域づくりを担う人材育成に向けて

**東**日本大震災と原発事故を機に、現在の社会の脆弱性があきらかになり、くらしや社会システムに関する意識に大きな変化が生まれてきています。科学技術とどう付き合うのか、社会に必要なものをどう賄うのか、自分たちの暮らしをどう作っていくのか、そして社会のルールをどう作りなおしていくのか、市民自身が考え選択していくことの重要性が、あらためて注目されています。今こそ、対話の場づくりを通して、持続可能な社会を再構築する力を人々の中に生み出していく時であり、それこそがESDの役割です。

「ESD×生物多様性」プロジェクトは今年、3年計画の最終年。これまでの事例研究やとりまとめをベースに、生物多様性を大切にしたい地域づくりを担う人材育成モデル事業を3地域で実施するとともに、『ESD×生物多様性 人材育成ハンドブック』を制作・発行します。また、被災地の復興・再生へのESD関係者の取り組みを、生物多様性の視点から紹介していきます。

#### ■震災復興×生物多様性×ESD

##### 全国ミーティングin仙台

6月25-26日、仙台広域圏ESD・RCE運営委員会と宮城教育大学の協力を得て、震災復興と生物多様性をテーマとした全国ミーティングを開催しました。仙台市教育委員会やNPO法人森は海の恋人、くりこま高原自然学校、南三陸町歌津の結組織・伊里前契約会など、ESDを通してつながりのある被災地の方々から現状を報告いただき、ESDのネットワークとしてできることを議論しました。(詳しくはESDレポート27号をご覧ください)



#### ■モデル事業の実施と

##### 人材育成ハンドブックの制作・発行

2009年から取り組んできた事例収集や分析をもとに、2010年は生物多様性を大切にしたい地域づくりのための人づくり(=ESD)を地域で広げ、深め、つなげるためのアプローチ方法を6つのステップに整理しました。今年度はこのアプローチに取り組む地域を定め、以下の3つの地域で「中学校」「動物園」「都市農村交流」を核にした人材育成に取り組むつつ、具体的な手法なども盛り込んだ地域の人づくりのためのハンドブックを発行します。

#### ◆地域とともに獣害を考える

##### with 岡崎市新香山中学校

##### 愛知県総合教育センター

岡崎市立新香山中学校は、愛知県岡崎市の郊外にあり、一部は新興住宅地ですが、7割以上は山林という校区です。この校区の大きな悩みは獣害。畑の作物は、イノシシ、ニホンザルに容赦なく狙われます。中学校で生徒たちが大事に育てたササユリの根もイノシシに食べられてしまいました。この校区の獣害は、ここ数年が特にひどく、地域では、新たに山林を切り開いてできた建売住宅団地や、校区の山林を縦断して建設中の第二東名の影響ではないかと考えられています。

そこで、新香山中学では、総合的な学習の時間を中心に、イノシシなどの大型ほ乳類とどう共生するか考える授業を開始しました。生き物調査や地域の大人との話し合いを通して解決策を探ります。

#### ◆世界の生物多様性を学べる動物園に

##### with 愛媛県立とべ動物園

##### NPO法人園DEピース

##### NPO法人えひめグローバルネットワーク

愛媛県伊予郡砥部町にある「とべ動物園」。園内には、約170種823点(平成22年3月31日現在)の動物が、地理学、分類学、行動学にもとづきバランス良く集められています。「えひめグローバルネットワーク」では、書物などでは知ることのできない生きた知識・経験を豊富に持っている飼育係の方々や「とべ動物園の動物から考え、学び、行動する会」として設立された「園DEピース」のメンバーとともに、とべ



とべ動物園のピースくん

動物園を「世界とつながる生物多様性」を学ぶ拠点として活用していこう、と動き始めました。これから、学校関係者や地域の方々とともに、学びあいがスタートします。

#### ◆都市農山漁村交流で棚田の再生へ

##### with 安房鴨川と高島平の住民グループ

都会にも「限界集落」があります。東京都板橋区の高島平団地は現在高齢化率34%。あと数年で50%を超えるといわれ、中山間地を上回るスピードで高齢化が進んでいます。一方、千葉県の外延部では過疎化が進行し、放棄される棚田を守ろうとする人々の動きが起こっています。安房鴨川には二子棚田という海の見える開放的で美しい棚田があり、保存会の人々が棚田の存続と生物多様性の維持に頭を悩ませています。

そんな両者を東京の人材育成NPO・ECOMの「生命地域再生コーディネーターコース」が結びつけました。9月から高島平の人々が足を運び棚田の存続と多様性の維持に向けた活発な交流が始まります。都市と田舎の限界集落がお互いを支えあう画期的な試みとなります。



## 宮城県気仙沼市唐桑町

# 『地元のリソースを生かして地元で産業が生まれる復興の形を』

NPO法人森は海の恋人 副理事長 <sup>はたけ やま まこと</sup> 畠山信さん

**牡** 蠣養殖を営む漁師・畠山重篤さんが、上流の森に植林を始めたのは23年前のこと。この活動は「森は海の恋人」のキャッチフレーズとともに、豊かな海を育んでいるのは上流の森であるという認識と、森づくりへの参加者を全国に広げてきました。今回お話をうかがった畠山信さんは、鹿児島県の屋久島で環境教育に携わったあと、故郷の宮城県気仙沼に帰り、2010年に父・重篤さんとともにNPO法人森は海の恋人を設立。それまで行ってきた森づくりや環境教育活動を引き継ぎ、牡蠣養殖業と二足のわらじで、くらしと自然のあり方に関するメッセージを発信し続けています。東日本大震災による大津波で被災、全国から駆けつけるボランティアの受け入れ・調整に奔走しつつ、地域の復興に取り組み始めた畠山さんを、唐桑半島に訪ねました。



新しくできたばかりの牡蠣養殖イカダが浮かぶこの穏やかな漁港を津波が襲った…

### 一 津波から月日が経過した海の状況を教えてください

津波直後の海の状況は、本当にひどい有り様でした。これは当然どうにもならないのではないかと正直思っていたのですが、でも1ヶ月もすると、様々な生き物が海に戻ってきました。海は強いんです。津波があったからといって海を恨む気持ちはありません。われわれ生産者は海に生かしてもらっていますから。その海の再生をしなければということで、生きものの調査も進めようとしています。

### 一 今、生産者の皆さんは？

生産者としては心が折れること、地域としてはそれによって人が流出してしまいうことが一番つらいです。もう漁は続けられないと言う生産者たちに声をかけて、牡蠣の養殖のイカダづくりなどのバイトをしてもらっています

雇用がなくなると人がいなくなります。人は仕事のあるところに行ってしまうから。震災復興後のこれからの雇用については、津波のことを考えると海だけでは不安で、もっと多角的に展開していく必要を感じています。その一つとして、林業があります。丸太を特殊な方法で熱加工する

工法でつくった木材は、樹種を問わないので地元の木でもできます。仮設住宅には2年間という期限があって、その間に復興住宅をつくらなければなりません。せっかく何もなくなったところでの地域づくりということで、地元の資源を使って家を建てる、地元の木を使う、それが産業にならないだろうかと思っています。

### 一 林業以外についてはどうでしょう？

設備投資にあまりお金のかからない観光業としては、油吸着マットを使って津波後の漂着ごみを拾い集めながら行なうシーカヤックのツアーも企画しています。

この特産の牡蠣についてはこんな話もあります。ヨーロッパで牡蠣漁の盛んなところといえばフランスやスペインがありますが、以前そちら方面の牡蠣が病気で大変な状況になったときに支援したことがあるんです。そのお返しに、「今度はうちが宮城の牡蠣を助ける番だ」と言ってきてくれています。

実は私の友人がやっていたスタンドバーが、津波でダメになってしまいました。そのお店をスペインのバルみたいな形で、あちらが支援してくれる牡蠣も使わせてもらいながら、地元の人が気軽に集まっ

て楽しめる「オイスター・バー」としてリスタートできないだろうかと思っています。

### 一 地元の人の地元のお店というのは嬉しいですね

津波の前は、国道沿いに大きなショッピングセンターばかりが建っている状況でしたが、そうではなくて、地元の材、地元の人、地元のリソースを生かして地元で産業が生まれるような持続可能なちっちゃなまち・こじんまりとしたコロニーのようなエコタウンづくりを、この震災・復興を機に目指していければと思います。もちろん、ヨーロッパの牡蠣漁師の人たちのようにつながれる人たちとはどんどんつながりながら。他にも太陽光パネルを提供してくれる人、バイオマスエネルギーについて教えてくれる人、などなど、いろいろな人たちが多様な形で協力を申し出てきてくれています。

全部で52軒あった私のところの集落は津波で流されて4軒しか残りませんでした。「集団移転してエコタウンをつくりましょう」という案に全員が賛成してくれました。

取材報告：中川哲雄



視察者に養殖牡蠣の説明をする畠山さん(右)

